

長崎県幼児教育センターだより



No. 29 2026. 7. 29



～ 園長等運営管理協議会(6/11・12) ～

1日目は185名、2日目は133名と、近年にない多数の参加をいただきました。会場に足を運んでも研修をしたいという皆様の思いをありがたく感じました。一方で、公開保育を2部制にし、協議会を省かざるを得なかったことが大きな反省点です。来年度は、保育を参観するにも、協議会をするにも適正な人数を前もって定め、上限に達したら申し込みを締め切るなど、より充実した研修となるよう工夫をしたいと思います。

保育のデザイン研究所の矢藤誠慈郎先生の講義が大変好評で、アンケートでも「大変参考になった」89%、「参考になった」11%でした。「保育における組織マネジメント・リーダーシップの在り方 ～変化を恐れず小さな試行錯誤を重ねて、保育者が学び合う風土をつくる～」というテーマの下で、園内研修や公開保育の進め方の例示などもしていただきました。◆時間を工夫する（「時間がない」を言い訳にしない）◆できない理由を探すより少しでも進める工夫をする（100%を目指さない）◆魔法はないのでいろいろ試す・・・など、日々の実践を見直しながら1歩を踏み出してみようと前向きになれる講義でした。

～ 幼児教育研究協議会(7/22) ～

大村市立放虎原こども園に研究発表をしていただき、皆様と一緒に幼保小連携について考える時間になりました。この会も予想以上の約150名のご参加がありました。

互惠性のある交流活動にするために、計画シートには園と小学校のそれぞれの＜ねらい＞が示されていました。また、＜共通の活動に対する先生の援助＞には「自分たちの力で遊びを進めていけるよう、様子を見守る姿勢を基本とする」「普段の生活に生かせるよう、良い関わりを見付けたら具体的に価値づける声掛けをする」などが記載されており、両者がよく話し合って作成されたことがうかがえました。架け橋期のカリキュラム作成や交流活動を通して、お互いの教育・保育の理解が深まっている実践事例でした。

🐣 小学校 1年生の教室で見つけました 🐣

ある学校の1年生の授業を紹介します。見る前に、校長先生から、気になる子どもが4割ぐらいいると聞いておりました。しかし、その子どもたちも含めて授業は落ち着いて成り立っていました。席を立ち回ることもなく。入学して3か月ほどたった時期のことです。その秘訣はどこにあるのでしょうか。

見せていただいたのは、国語の文を書く授業でした。図工の時間に子どもが描いた絵を黒板に貼ると、子どもたちは座ったまま、感想や思ったことを口々に言います。それを先生は、相槌を打ちながら、受けとめます。ここに、自分の思いを表すことと、それを受け止めてもらえる安心感が見えました。

また、先生のちょっとした言葉遣いや雰囲気によって、子どもたちは手を挙げて発表もできます。座ったまま自由に発言するのか、挙手をして発表するのか、この違いは、子どもと担任の関係性で成り立っていました。

45分の授業は、いくつも切り替えのポイントがあり、子どもが飽きないよう工夫されていました。

先生は「文を書くのが苦手な人」と尋ね、「なぜ、文を書くのが苦手なのか教えてほしいな」と声をかけていました。子どもは「考えるのが難しい」や「何を書くか想像できない」などと答えていました。子どもの声を聞きながら、その声に寄り添って、授業が展開されていました。

早く書き終えた子と、まだ書いている子の時間の差が生まれます。そこで先生は、早くできた子どもが時間を持て余さないように「終わった人は、後ろで友達同士紹介してください。」と伝えていました。

授業の終わり頃になっても、書き終わらない子もいました。先生は、「書けていなくても大丈夫です。」と安心できる言葉をかけました。そして、みんなで学級目標を声に出しました。「**だんだんできるよ だいじょうぶ ゆうきをだして やってみよう**」先生は45分間ずっと笑顔でした。架け橋期への理解が進み、このように安心感を土台とした保育と授業が展開されることを願っています。

※幼児教育センターだよりは、各市町教育委員会を通して、県内の全小学校にも配付しています。

文責：室野亜津子

～独り言～

幼保小連携推進について、幼保小の架け橋プログラムとして文部科学省の重要施策の一つであると理解していますし、幼児期と小学校期の学びをつなぎ高めることがこれからの日本の教育の基盤になるということも十分認識しています。私自身もとても重要な取組であると思っていますが、このように思うようになった理由は大きく二つあります。

一つ目は、幼児教育とは全く関係ありませんが、少年サッカーの指導を通して得た気付きです。私は、小学生で身に付けた技術や経験を中学校でもその年代に応じて指導してくだされば、一人一人がサッカーを好きになり、さらに伸びていくだろうと思っていました。最初に指導をさせていただいたチームは、ほとんどの子どもが同じ中学校のサッカー部に進みました。小学校と中学校の指導者同士が年間を通じて指導方法や子どもの情報共有等で交流していたため、子どもたちも安心して次のステージでのサッカーに移行できていたように思います。

二つ目は、小学校の教員である私が縁あって幼児教育に携わらせていただく中で抱くようになった、「もっと早く幼児教育の大切さを知っていたら」という思いです。幼児教育には、「安定した情緒の下」「幼児理解」「興味・関心に基づいた環境構成や教師の援助」「幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合った保育」など小学校での授業や活動に生かせる視点がたくさんあります。もし私自身が早い段階でこうした考え方に触れていれば、これまで受け持った子どもたち一人一人の資質・能力をもっと豊かに育むことができたのではないかと思います。

「後悔、先に立たず」ですが、今自分にできることは、この二つの思いをベースとして、県内の幼児教育と小学校教育それぞれに携わる大人が互いの教育を理解、尊重しながら、子ども一人一人の学びをつなぎ、高めていける組織やノウハウを構築することであり、それを持続可能な取組にすることです。子どもの「学び」をつなぐ大人の「つながり」を期待しています。

長崎県幼児教育センター長 高田敏彦